

# 博物館の新たな挑戦

吉田憲司

総合研究大学院大学教授 比較文化学専攻/人間文化研究機構国立民族学博物館教授

地球規模の交流が盛んになるとともに、文化の違いを超えた新たな社会の構築が模索されている。その中において、文化をつくる装置である博物館の役割や機能はどう変化しているのだろうか。

## 文明の転換点に立つ

地球の文明は、今、数百年来の大きな転換点に立っている。これまでの、「中心」が一方的に「周縁」を支配・表象するという力関係が変質し、従来、それぞれ「中心」・「周縁」と位置づけられてきた人間集団のあいだに、創造的なものも破壊的

なものも含めて、双方向的な接触と交錯がいたるところで生起するようになっていく。しかも、こうした双方向性の動きが認められるのは、集団間の政治の分野のみではない。学問の分野でも、これまで客観性の追求の名の下に進められてきた知の営みが、いずれもその時々の歴史や社会制度に制約されたものでしかない

ことが改めて確認され、学術的な知というものも、さまざまな人びとのあいだの相互作用によって絶えず構築され続けていることが自覚されてきた。

いわゆる「本質主義」から「構築主義」への転換、「構造主義」から「ポスト構造主義」への展開は、知的生産者と社会の間の相互作用、知識の生産の双方



写真1 2006年に開館したフランスのケ・ブランリー美術館



写真2 バムン王宮 20世紀初頭、ンジョヤ王の設計により建設された王宮の2、3階が、現在博物館として公開されている。カメルーン（1996年）。

向性が認識されてきた過程と言い換えてよい。そして、そのように考えれば、こうした認識の変化が、人文科学だけでなく、自然科学の分野にも、同様に生起していることがみてとれよう。社会に支えられなければ、最先端科学も巨大サイエンスも成立しえない。自然科学の分野で、にわかに社会との接点を確保しようとするサイエンス・コミュニケーションが目立つようになってきている理由はここにある。

博物館の営みもまた、このような動きと無縁ではありえない。公共博物館の歴史が1753年の大英博物館の創設（開館は1759年）から始まったとすれば、現在はそれから250年。われわれは、今、博物館の歴史の中で、やはり、数百年単位での大きな転換点に居合わせている。

## 欧米の主要博物館の変貌

——ベルリン、ワシントン、パリ、ロンドン

20世紀から21世紀の変わり目、あるいはミレニアム（1千年紀）の変わり目に当たる2000年前後に、博物館の世界で大きな変化が見られた。世界で主導的な位置を占めている博物館が、およそ1年半という短い期間の間に、相次いで、非西洋地域に関する展示、とりわけアフリカ展

示場を新設、あるいは全面改修したことである。

まず1999年9月に、ベルリンの民族学博物館が「アフリカ：芸術と文化」というタイトルをつけて新しいギャラリーをオープンさせた。同じ年の12月、アメリカ・ワシントンのスミソニアン研究機構の国立自然史博物館が、アフリカ展示場をおよそ10年ぶりに全面改修し、「アフリカの声AFRICAN VOICES」というタイトルで公開を始める。翌2000年4月には、フランス・パリのルーヴル美術館に新たに「アフリカ、アジア、オセアニア、南北アメリカ」美術を対象としたギャラリーが開設されている。その中では、アフリカの作品の展示に最も大きなスペースが当てられた。そして、2000年3月には大英博物館が、1970年代から別館の人類博物館に設けていた民族誌部門を統合するのに合わせ、新しくアフリカのギャラリーを本館の中に設けた。

その後、やや時を置いて2006年6月にパリのケ・ブランリー美術館——「アフリカ、アジア、オセアニア、南北アメリカ」美術に特化した美術館である——が開館するが、それもまたこうした一連の動きの延長線上にあるものといってよい（写真1）。なお、遅まきながら、私たちの

国立民族学博物館でも、本年度、2008年度から、本館常設展示の全面改修に着手することになった。その初年度の改修の対象となるのは、奇しくも、アフリカと西アジアの展示場である。

世界の主要博物館が、非西洋の展示、とりわけアフリカの展示をいっせいに国家プロジェクトとして改修もしくは新設したのは偶然ではあるまい。かつて「未開」の地と呼ばれたアフリカの出身者は、15世紀末以来の奴隷貿易やその後の出稼ぎを通じて、大量にヨーロッパ・アメリカ社会に組み込まれた。そのアフリカという存在が、欧米社会に対して、新しい世紀、新しいミレニアムにおいて、どのように文化の違いを超えて新たな社会を構成していくのかという問題を、最も先鋭的で切実なかたちで突きつけたのである。世紀とミレニアムの変わり目における主要博物館の改修・新設の動きは、その問いに対する応答として捉えることができる。

ただ、そうした問題に対して、それぞれの博物館がとった対応は対照的なものであった。ベルリンの民族学博物館とロンドンの大英博物館の新しいアフリカ展示には、奇しくもともに「アフリカ：芸術と文化」というタイトルがつけられ、



写真3 国立民族学博物館（民博）でのカムイノミの儀礼（2007年11月）。民博では、1年に一度、収蔵されているアイヌのモノたちのカムイ（霊的存在）に向けた儀礼、カムイノミを実施している。儀礼では、日頃、収蔵庫に保存している器や道具を実際に使用する。それは、収蔵品に改めて命が吹き込まれる瞬間である。こうした活動も、フォーラムとしてのミュージアムを実現する試みの一つである。

アフリカ各地の芸術と文化の紹介に重点が置かれている。このアフリカの芸術と文化のとりあげ方という点では、その姿勢とともに、スミソニアンとルーヴルが両極をなしているように思われる。スミソニアンの自然史博物館は、徹底的にアフリカ人・アフリカ系アメリカ人の声を取り入れてアフリカの文化を紹介しようとし、一方のルーヴルは「普遍的」とされる美的価値観に基づいて、芸術・美術に特化した展示を実現したからである。しかし、ルーヴルも聖域ではありえなかった。新たに購入され展示された作品の中にナイジェリアのノクの遺跡から盗まれた可能性の高い作品が含まれていることが指摘され、返還の要求が沸き起こ

る。最終的には、ナイジェリア政府とフランス政府の間で協定が結ばれ、当該の作品をナイジェリアからフランスへの長期の寄託品とする一方で、フランスはナイジェリアの文化遺産保護に補助を出すことで決着を見た。このように、ルーヴルですら、博物館のもつ既成の権威だけに依存しては成り立たない状況が生まれてきているのである。

#### 民族単位の博物館建設競争

こうした動きの一方で、近年、世界の諸民族のあいだで、自らの文化を自らの手で次代に伝え、紹介することを目的とした博物館建設が盛んになってきている。私が深く関わってきたアフリカの例

を引こう。カメルーン高地のパムンという王国では、今からおよそ100年前、20世紀のはじめに出たンジョヤという王が自ら設計図を引いて建てた王宮の一部が、最近王宮博物館として整備され、一般に公開されるようになった（写真2）。この博物館は、儀礼のたびに展示されている器物を持ち出して実際に用い、儀礼のあと展示ケースに戻して展示を続けるという、文字通り生きた博物館として機能している。

また隣接するバフツ王国も、植民地時代にドイツの手で築かれた王宮の正殿を博物館に改装し公開をはじめている。

次に、東アフリカのザンビアでは、1980年代、主要民族が、「伝統を始めよ

う」をスローガンに、競って民族単位の新たな祭りを生み出していった。こうした祭りの創生は、1990年代に入ってひと段落するが、その1990年代後半になると、今度は、各民族がそれぞれの民族の手によるそれぞれの民族の文化の展示を目的とした博物館の建設で競い合うようになる。祭りは一時的なものなので、そこで用いるような自分たちの遺産を、祭りを開く場所の近くで恒久的に展示しようという動きが起こってきたのである。5、6年以内に、またすべての民族集団がそれぞれの博物館を持つという状況が生まれそうな勢いである。

これらの例で重要なことは、こうした民族単位の博物館が想定している観客は、外部の観光客というよりもむしろ地域の住人であり、そこで住人たちのあいだにそれぞれの民族の文化に対する誇りを醸成し、さらにはそれらの文化の継承をはかっていこうとしているという点である。とはいえ、大多数の住民にとって、また博物館の建設計画を進めようとしている当事者たちにとっても、博物館という装置はけっしてなじみ深い存在ではない。文字通り、手探りの状態で博物館建設運動が進んでいるというのが実情である。

民族単位で作りに出される博物館というのは、個々の民族自身による自分たちの文化、つまり自文化の管理と表象の装置という意味では、基本的には歓迎すべき動きである。ただ、そこで築かれる民族の誇りというのが、排他的で偏狭な民族的アイデンティティの形成につながるのなら、それは逆効果であろう。それだけに、その活動を常により広い世界に開いておくこと、より広い共通のアイデンティティの醸成につながる道を確保しておく必要がある。

#### 交流と創生の場

博物館という装置は、とくに非ヨーロッパ地域の場合、多くは植民地時代に形成され、植民地主義の申し子のようなところのある、権力的な装置である。ただ、これだけ、博物館という装置が世界



写真4 国立民族学博物館（民博）のイントロダクション展示。異文化についての展示を見る視点をまず身につけてもらおうと、2007年春に新たに設けられた。民博では、このイントロダクション展示の開設に引き続き、常設展示全体を順次改修することとなった（手前のエビをかたどったものは、ガーナで流行している棺桶。死者の職業や性格にちなんで制作される）。

各地に広がってしまった以上、それを別の形、もっとポジティブなカタチで使っていく方法があるだろう。現在、世界各地のキュレーターたちが努力しているのは、まさにそれを探し出そうという試み、あるいは挑戦と言ってよい。

かつて私は、ダンカン・キャメロンの、ミュージアムには、「 temple」と「 forum」という二つの選択肢があるという主張を引用して、これからのミュージアムには、ますますフォーラムとしての役割が求められるだろうといったことがある（Cameron 1974, 吉田1999）。ここでいう、 templeとは、すでに価値の定まった「至宝」を人びとが拝みに来る神殿のような場所、一方、フォーラムとしてのミュージアムとは、人々がそこに集まり、未知なる物に出会い、そこから議論が始まっていく場所と言う意味である。それから10年以上たち、間違いなく、博物館は地球規模で、双方向の接触と創造の場、フォーラムとしてのミュージアムの方向に向いて大きく動き出している。



吉田憲司（よしだ・けんじ）  
専門は博物館人類学。アフリカを中心に、仮面や儀礼、キリスト教独立教会の動向についてのフィールド・ワークを続ける一方、ミュージアム(博物館・美術館)における文化の表象のあり方を研究し、その作業から得られた知見を反映した展示活動を国内外で展開している。